

一九九〇年代以降の大学生と大学での学び



溝上 慎一

京都大学高等教育研究開発推進センター

□ 大学生論とは

大学生論は、一九六〇年代以降の青年論、若者論を多分に継承している。社会学者の小谷敏氏によれば、一九七〇年代までは青年論に関する本が多く出版されているが、一九八〇年代に入ると、変わって若者論に関する本が多く出版されている。これは小此木啓吾氏が言うところの、マーケットの主人公が大人から若者へとシフトしていく、大人の権威が失墜して若者が一人前でないことの劣等感を感じ

なくなっていく、新しいものを身につけている若者が大きな顔を始める、そういう世の中の到来と関係があるようである。大人の一步手前の発達期を論じる青年論は、その意味で終焉したと言われている。したがって、一九八〇年代の若者論ブームのテーマは、ファッションだとかゲーム、マンガなど、若者を取り巻くユースカルチャーが中心である。こういう区切り方は、そう間違えたものではないように思われる。もともと、「新人類」という言葉に象徴されるように、おもしろ半分には若者論が展開されていた嫌いは否めない。

先週、ある新聞社の企画した座談会に参加したが、そこである著名な先生が、次のような話をされた。今の若者は、いろいろなコミュニケーションの中で違った顔をする。自分たちの感覚で言ったら、それは一本筋が通ったパーソナリティーを持っていないということだ。駄目だとなるのだけど、学生に聞いていくとそれは立派な姿だとなる。それはなぜだと聞いてみると、多くの違ったコミュニケーションの中で、ふさわしい顔がしっかりと取れるからだそう。先生は、若者がこういうふうに見えることに非常に驚いたそうである。

これは若者論であるが、そういう大学生論バージョンも



●みぞかみ・しんいち●一九七〇年、福岡県生まれ●『自己の基礎理論―実証的心理学のパラダイム―』（単著、金子書房、一九九九年）。「大学生の自己と生き方―大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学―」（編著、ナカニシヤ出版、二〇〇一年）。『大学生論―戦後の大学生論の系譜をふまえて―』（編著、ナカニシヤ出版、二〇〇二年）。『開かれた大学授業をめざして―京都大学公開実験授業の一年間―』（共著、玉川大学出版部、一九九七年）。『大学授業研究の構想―過去から未来へ―』（共著、東信堂、二〇〇二年）

あつていいかもしれない。しかし、筆者が大学生論をやるときには、大学での学びを基軸に置くことが多い。大学生は教育機関に在籍する者のことであるから、まず大学での学びが中心のテーマとなつて然るべきであろうし、筆者は大学教育の研究機関にいるから、現代気質的な大学生論のテーマはどうしても後回しになつてしまふ。

筆者の大学生論は、青年心理学の延長線上で展開している。青年期というのはおとなと子どもの狭間期というのが基本的な定義で、青年心理学はその時期の発達の意味を追求する学問分野である。大学教育の文脈で大学生を見るときは、彼らの人間的成長や発展が基本テーマとなりがちであるが、このテーマの重要な一翼を担っているものこそ青年心理学であると筆者は考えている。筆者が大学生論を青年心理学をベースにおこなつているのは、そういう理由からである。

したがって、こうして扱われる筆者の大学生論のテーマには、学びやそれを取り巻く大学生活や将来展望、自己の構築、キャリア形成などがある。そして、一九九〇年代末期から、初年次教育の必要性や学生の学習力低下、就職率の悪化、フリーターの増加などが頻繁に議論されるようになり、単なる大学生論ではない、大学教育改革とリンクす

る大学生論が展開可能になってきたわけである。

㊦ 経験論的的大学生論に振り回される

最近、シヨックなことがあった。

二〇〇二年に筆者は『大学生の自己と生き方』という本を編集して出版した。それについて、『週刊文春』（二〇〇一年十一月二十二日号）であるコメントが出た。そこでは、

「大学生二千人に対する面接調査結果にもとづき、現代の大学生固有の意識の諸相を探る溝上慎一編『大学生の自己と生き方』（ナカニシヤ出版）はいろいろ考えさせられる。学業意欲が低かったり、目的意識が曖昧だったりすることは本当に大学生にとつて悪いことなのか」

と書かれていた。同じようなことが上述の座談会でも出て、ある先生は、

「溝上さんは大学生論で学び、学びと言うけれども、それは大学生論のテーマとしてはおかしいよ。ぴんとこない」

「そんなに勉強してしなあかんの？溝上さんはセンターにいるからね。あなたは学生にただ勉強させたいだけじゃ

ないの？」

「学習意欲なんて低くてもいいじゃないの。目的が曖昧でも将来何をやりたいとか全然考えていなくても、そんなものは自然と向こうからやってきて、気づいたら何とかならなっているものだよ」

とおっしゃった。その先生は非常にセンスのいい人で、筆者も尊敬する人であったから、彼が大まじめに言ったそうした考えが頭にこびりついて、ずいぶんと苦しめられた。

座談会の先生のお話を振り返って考えたのは、この先生は自分の経験をもとに大学生論を語っているということである。自分の学生時代、しかも大学紛争時代に京大を卒業して、今こうして社会で大活躍しておられる人の回顧話である。本人に言わせれば、人生そんなにうまくいってないとおっしゃるかもしれないが、それでも今、旧帝大の学部長クラスの先生である。この人を人生の成功者と言わないで誰をそう呼ぶのか。

筆者が言いたいのは、こうした人生の成功者が自身の懐古的经验論で現代の大学教育や学生の在り方に意見を述べるのは、かなり反則ではないかということである。ノーベル賞受賞者の福井謙一博士が幼少時に野原を駆け回ったのが独創性につながったという回顧録がある。しかしあの時

代、野原を走り回ったのは福井博士だけではない。みんな走りまわったのである。そのみんなはどうしているかというところ、ほとんどはノーベル賞とは無縁の世界で生きている。

筆者の大学生時代は、多くの先生方からすればついこの前のことのように見えるだろうが、そんな筆者でも、今の学生たちを見ていて自分の経験は役立たない、むしろそれに頼っていると百害あって一利なしだと感じる。カウンセリングでも、自分に不登校の経験があつて、何か役立ちたいといつてカウンセラーになろうと志望する学生たちがいる——もちろん、動機としては悪いものではないが——。

しかし、経験があるばかりに素直にクライエントの話を聞くことができないということが生じる。クライエントの問題は、一個人がいくら深い経験をしても、その一個人の経験など軽く超えるものである。中途半端な一個人の経験などない方が、よほどいいカウンセラーになるとさえ言えるかもしれない。大学生論も同じである。

ある教授がうちの大学のゲストスピーカーに来て、学生たちに「今、君たちに大事なものは、まず出会いだ。良い先生、先輩、友人などに会うことが人生を決める」と強くおっしゃった。そして、その方途として教授が強調したのは、「それには何もしないことが重要だ。ぼうつとしていたら、

自然に向こうから出会いはやってくる。一生懸命あくせくして、こうだ、ああだなどと考える必要はない」ということだった。

学生たちはこぞつてこの教授に反発した。彼らは、「ぼうつと待っていて、何もなく卒業してしまつたらどうするのですか」「先生は、ぼうつとしていたらいい、ぼうつとしていたらうまくいくとおっしゃいますが、ぼうつとして何もなく終わった人が、いやそちらの方がたくさんいるのではないのでしょうか」と言った。それは正しい。うまくいった人の話というのは、うまくいったところからしかモノを見ていない。うまくいっていない世界を見るにしても、うまくいった世界との比較で見えないから、結局は見えないことと同じになる。受験でもそうである。うまくいった人の背後に、同じようにやつたけれども結果うまくいかなかった人がたくさんいる。われわれ大人が経験を語りたい気持ちはわかるけれども、それを教育論や学生論などにしていく場合には、われわれは相当注意深くあらねばならない。この問題では、学生たちの心理の方が正しかったと筆者はみている。

筆者が大学生論で学生たちの学びを取り上げる根拠の一つに、学生たち自身が広い意味での大学での学びを問題視

しているということがある。もちろん、その背後には、彼らの学生生活や生き方、将来設計などの問題が見え隠れしている。筆者は、彼ら自身が問題にしていること、それ自体を大事にしている。理屈から入っているわけではない。だから、筆者が学生たちに勉強をさせたいとかそういうことがはじめにあるわけではない。

もつとも昨今、大学ではしつかりと勉強をしなければならぬ時代に入ってきている。筆者はそういう主張をしないわけではない。しかし、そんなことは筆者が言わなくても、学生自身がよく自覚している。わかっているのは、この年配世代だけではないだろうか。経験が邪魔をしていると感ずる。

もう一つ補足すると、筆者は訳もなく学生たちに大学の学びが必要だとは言っていないつもりである。筆者が学生たちの学びを取り上げる背景には、先にも述べたように、彼らの大学生活や生き方、将来設計などが、学びの問題にリンクして見えてくるということがある。彼らの学び問題は彼らの生き方問題なのである。筆者は『大学生の自己と生き方』のインタビュー調査で、彼らの自己や生き方だけを大きく扱い、大学での学び云々はまったく想定していなかった。それでも、結果は相当大学の学び問題に入ってい

かざるを得なかった。筆者はそこに筆者なりの大学生論の始まりを感じているし、かつ、現代大学生の独特の生きるダイナミックスが集約していると考えている。本稿の趣意もそこにある。

Ⅲ 学びを自ら問題にする大学生の姿

学生たちが本当に大学での学びを自らの問題としているのか、ということをごここでは取り上げたい。筆者の『大学生の自己と生き方』（ナカニシヤ出版）で示したインタビュー調査の結果では、学生の自己評価の高低にもつとも関わっていたのが、クラブやサークル、アルバイトなどではなく学業であった。

ここでは、日本私立大学連盟（以下、私大連）の調査結果を見て、それを確かめようと思う（表1参照）。私大連というのは、周知のように、私立大学の質的向上を目指した団体であり、二〇〇三年六月現在で全国の百二十三の私立大学が加盟している。ここで紹介するのは、大学生活の充実度の違いによる現在の興味や関心の内容を尋ねた学生生活実態調査の結果である。それを見ると、大学生活が充実している者ほど「勉強」に興味や関心が高く、充実してい

表1 大学生生活の充実度の違いによる
現在の興味や関心の内容 (1994年実施)

パーセント	充実している	普通	充実していない
20-25	勉強	友人	異性
	友人	スポーツ	
	課外		
15-20	スポーツ	音楽	スポーツ
	異性	異性	音楽
	音楽		友人 車
10-15	旅行	勉強	アルバイト
	資格	旅行	旅行
		車	資格
		読書	読書
		アルバイト	勉強
		資格	
		就職	
5-10	読書		課外
	車		就職
	アルバイト		パソコン
	就職		
0-5	パソコン	パソコン	その他
	行事	ビデオ	ビデオ
	受験	その他	受験
	その他	受験	ボランティア
	自治活動	行事	自治活動
	ボランティア	ボランティア	宗教活動
	ビデオ	自治活動	行事
	宗教活動	宗教活動	政治活動
	政治活動	政治活動	

(注1) 日本私立大学連盟学生会(1997)図5・8(122頁)より作成。

(注2) 分析対象者(有効回答者)は私大連加盟大学の学生7,805人である。

が見られることに筆者はまったく異論がないのだけれども、少なくとも筆者の学生時代であった一九九〇年代はじめなどではそうではなかっただろうという、ある種確信めいた感じを筆者は持っていた。周囲を見渡して、勉強云々で自己評価が上がったり下がったり、悩んだりしているなど、ほとんど考えられないことだったように思われたのであ

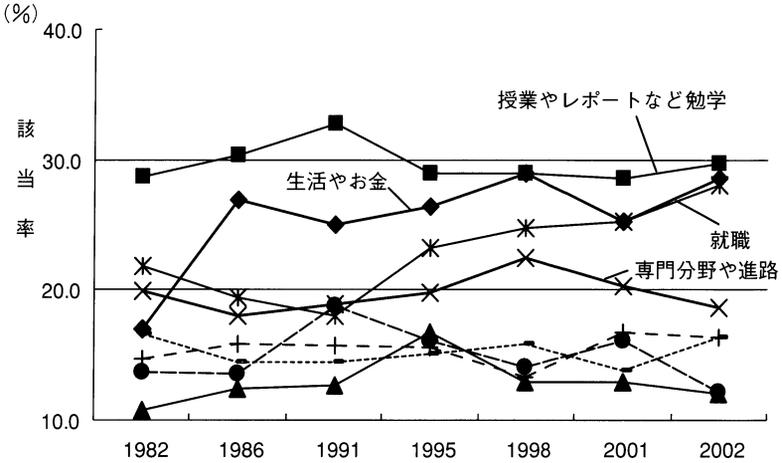
ない者ほど「勉強」への興味、関心が低いことがわかる。この結果は、筆者が『大学生の自己と生き方』で示した結果を支持している。結果の考察に携わった私大連の担当者、大学教育の根幹と考えられる正課(勉強)に興味をもてれば学生生活は充実したものになるという基本に、われわれはもつと自信をもつていいのではないかと述べているが、案外その通りかもしれない。

四 学びへの関心、悩みは今に始まったことではない

同様の結果は他にもたくさんあるのだが、それは紙面の関係上省略するとして、ここではもう一つの疑問、大学の学びに関する関心や悩みを抱くのは現代大学生の特徴なのかということを考えてみたい。

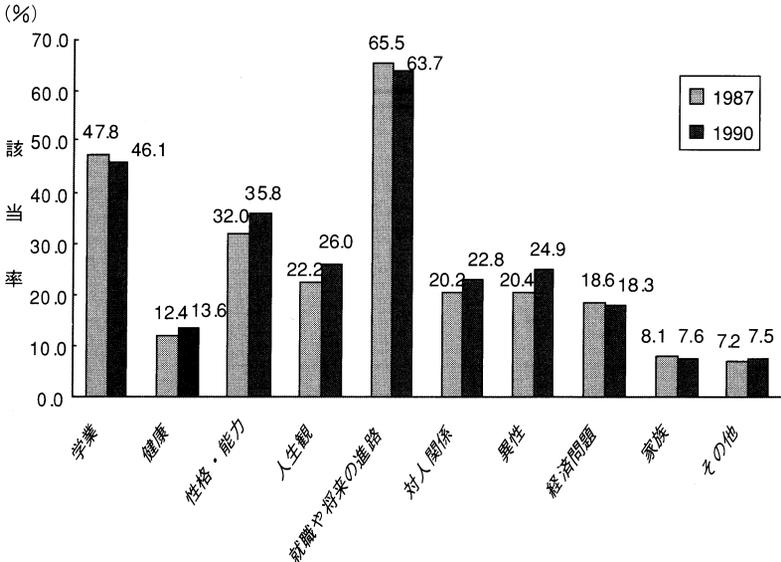
日々学生たちと接していて、最近の学生にこうした特徴

図1 日常の中で気にかかっていること（複数回答）



(注1) 全国大学生生活協同組合連合会「CAMPUS LIFE DATA」(2003) 37頁の表より作成。
 (注2) 2002年時の分析対象者（有効回答者）は全国66国公立大学の学生12,715人である。
 (注3) 「CAMPUS LIFE DATA」では「日常の中で気にかかっていること」として16項目が掲げられているが、ここでは10%以上の該当率をもつ項目だけを抽出して作図している。図で項目名表記していない他のグラフは「生きがいやうちこめるものが見つからない」「ガール（ボーイ）フレンドや異性のこと」「自分の性格や能力」「時間が足りないこと」である。

図2 不安や悩みの内容（複数回答）（1987年／1990年）



(注1) 日本私立大学連盟（1992）の図I-31より抜粋・作成。
 (注2) 1990年時の分析対象者（有効回答者）は私大連加盟大学の14,721人である。

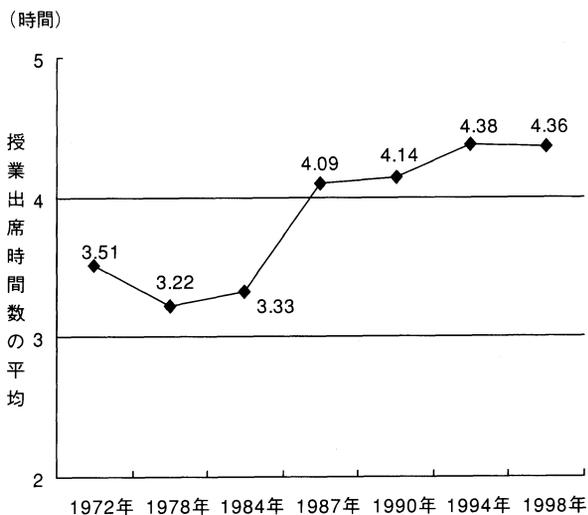
る。

ところが、古くからの時系列データをいくつか見ていると、授業とか学業に問題を抱えている学生はけっこう昔からいたことがわかる。たとえば、生協が毎年おこなっているキャンパスライフの全国調査を見ると、「日常の中で気にかかっていること」として一九八〇年代からずっとトップで該当しているのは「学業（授業やレポートなど勉強）」である（図1参照）。また、一九八七年と一九九〇年を比較した私大連のキャンパスライフの調査結果を見ても、トップで該当してはいないものの、不安や悩みの内容として「学業」が高い該当率を呈している（図2参照）。一九八七～一九九〇年の時期というのはバブル経済の真っ直中であったが、その時期でも不安や悩みとして「学業」の該当率は高かったのである。

図 注目すべきは高い授業への出席率

ところが、現体制で問題になるのは、授業への出席時間数である。図3は、一九七二～一九九八年にかけての私大連の時系列データであるが、一九八〇年末から一九九〇年代にかけて数字が上がっていく点に注目して欲しい。同様

図3 学生の授業出席時間数／日の平均の推移（1972～1998年）



(注) 日本私立大学連盟(1992)、日本私立大学連盟学生会(1997、2000)をもとに作成。

の傾向は、関西学院大学の『カレッジコミュニケーション調査』（谷田、二〇〇一）を見ても確認されるし、自由だとか放任だとかいわれる京都大学の『京都大学学生生活実態調査集大成―昭和二十八年度～平成七年度までの調査の分析・総括』を見ても確認される。

これだけ学生が授業に出席するその背景を考えてみたいが、その前に、学生たちが意欲的に勉強を始めたとはおそらく解釈しない方がいいということは前提としておきたい。というのも、これだけ大多数の学生を動かすダイナミックスを、そのような個人的な学習意欲などの心理的な要因に帰さない方がいいだろうと筆者には思われるからである。

さて、まず第一にカリキュラムである。一九九〇年代に入っでの大学教育改革では、カリキュラムが良かれ悪しかれ非常に整備された。とくに、多くの理科系学部のカリキュラムでは、必修科目やクラス指定科目などが増え、かなり過密になったはずである。また、コア科目や導入教育科目、情報教育科目など、以前にはなかった科目が登場し、全体的に提供科目数が増えている。

第二に、これはいい面だと思うのだが、先生たちの頑張る授業というのが、決して多くはないのだけれど、それなりに出てくるようになった。学生たちは、面白い授業や自分にとってためになる授業には出席する。これが二つ目の背景ではないだろうか。興味深いことに、こういう授業には授業出席率の悪い学生でも出てきたりする。この部分は、学生たちの意欲を信用していいと筆者は思っている。

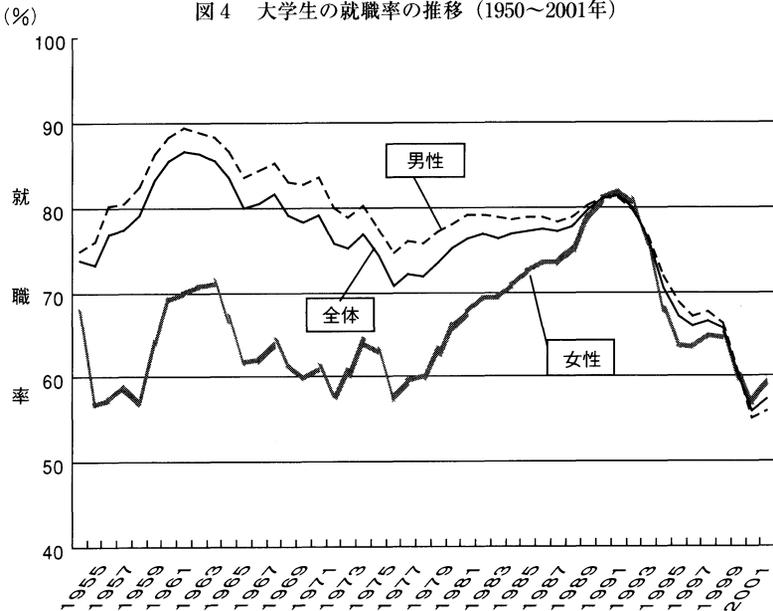
第三に、今はほとんどの大学でFD（ファカルティ・デベロップメント）や成績評価の仕方が問題化され教員に押し迫っている。学生からも授業評価を受け、その結果が他の教員と比較されたり、公開されたりしてフィードバックされる。否応なく、教員は授業改善の意識を高めることになる。こうなると、授業はこれまでのように何でもいとはならず、教員は何とか授業を工夫しようと頑張り始める。頑張り始めると、学生たちには聞いて欲しいので、出席を重視したり、授業終了後に感想やコメントを書かせたり、厳格な評価のもとに単位を出したりするようになる。学生たちは、こうして授業への出席を余儀なくされていく。

余談であるが、昔なら授業にまったく出席せず、テストの時にはじめて先生の顔を見たという話が跡を絶たなかったが、今はそういう授業は少なくなってきたのではないだろうか。アンケート調査をやっていると、「大学は聞いていたところと全然違う」「もつと遊べると思っていた」と戸惑いを隠せない学生が多くいることがわかる。こうしたレジャーランドの大学観は十年以上前のものではないだろうか。筆者たち大学の中にいる人間でも——もつと言えば筆者のような大学教育の専門家でも——いまの変わり行く大学の事情についていくのは非常に難しい。それ

は、変わりがあまりにはやすぎるからである。中にいる筆者たちでもこんなにはわからないのに、大学外の人たちがどれだけ大学の今の事情を理解しているか大いに疑問である。高校の先生や親御さん、予備校の先生など、大学に入ったら何とかなるとか言っているようだが、それはやはり十年以上前の大学観だと思ふときが多々ある。古い大学観で大学に入学してくると、大変なのは学生である。それで倒れていく学生がけっこういる。今、そういう調査を本格的にやり始めている。

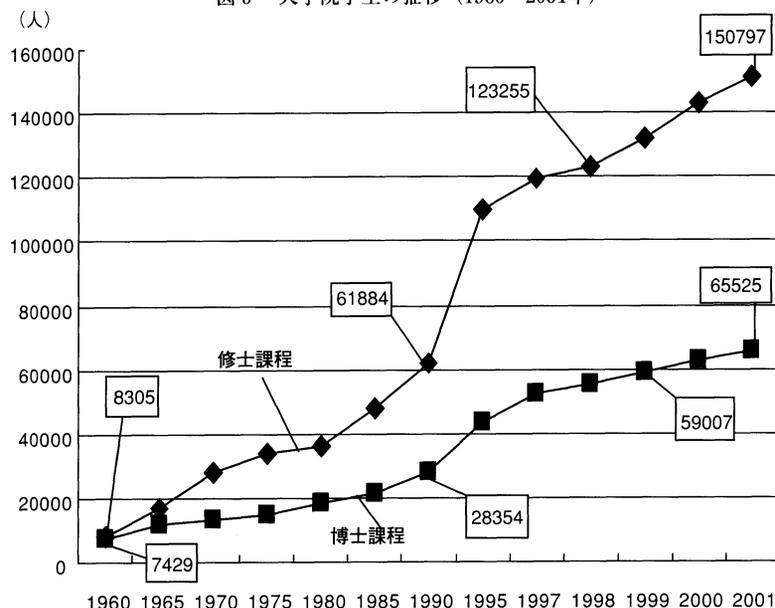
話を戻すが、第四に学生たちの就職事情である。図4は、大学生の就職率の推移（一九五〇～二〇〇一年）を示している。一九九〇年代後半期頃から学生の就職率が急速に落ちていくことが如実に表れている。言うまでもなく、この大きな原因は、バブル経済の崩壊である。学生たちは、ただ大学を出るだけでは就職ができないことを知っているの
で、大学での専門の勉強を生かした仕事に就こうと頑張つて勉強をしたり、あるいは、教職免許や資格（臨床心理士や社会福祉士、介護士など）を取ろうと授業をエクストラで取ったりする。就職部の課外講座やエクステンションセンターの講座を受けたりもする。学生たちはこうして朝から晩まで授業や講座に出て、あくせくと勉強を強いられて

図4 大学生の就職率の推移（1950～2001年）



(注) 文部省『文部統計要覧（平成14年版）』より作成

図5 大学院学生の推移（1960～2001年）



(注) 文部科学省『文部統計要覧(平成14年版)』大蔵省印刷局より作成。

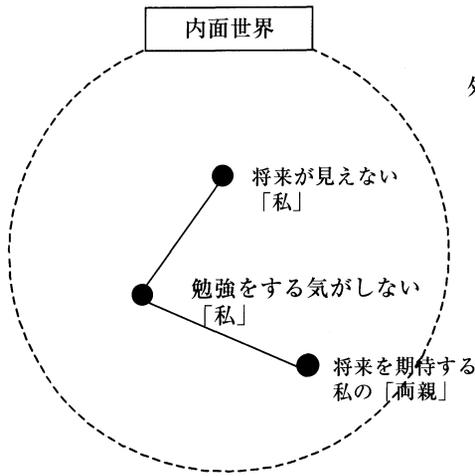
いる。もともと、それで学生たちの就職がよくなっているかは怪しいが、学生たちは人生がかかっているのどにかく必死である。

さて、図4で注意が必要なのは、一九九〇年代後半の落ち込み波形が、何も就職率の悪化だけを示しているわけではないということである。就職率は確かに落ちているが、そこには就職しないで大学院進学者や海外留学者が含まれている。図5に示すように、一九九〇年代の大学院への進学者数は、世の中の大学院化の趨勢を受けてうなぎ登りである。周知のように、今大学院への進学者は非常に多く、大学の研究者、理科系の技術者でなくとも、専門職の強いビジネスマン、弁護士、臨床心理士や社会福祉士などになるうと思えば、学生は大学院へ進学しなければならない。昨今のビジネススクールや法科大学院の新設ラッシュは、これを表している。この現象は、割合の違いはあっても、概してトップの大学からFランクと言われる大学まで関係なく生じている。

因 学びの背後にある自己や生き方の問題

以上をまとめると、大学生にとって学びは時代を問わず

図6 内面世界をポジション・ワールドとして表現する



重要な問題だと位置づけられる。しかし、一九九〇年代に入って、就職率の悪化や資格取得、大学院への進学などを背景に、学生たちの授業出席率は高まっている。ここで問題になるのは、こうした授業への高い出席率が、学生たちの高い学習意欲に支えられてのものなのかということである。もしそうであるならいいのだが、どうもそうではない。授業への出席率が高いといっても、実際には、

身体だけを教室に運んでいる学生が多いというのが現実のようである。

図6は、筆者が学生の内面世界をポジション・ワールドとして描くある種の説明図である（詳しくは溝上、二〇〇三）。理論的な説明は省くが、筆者はいつもこのようなイメージで学生の内面世界を考えている。この図で言えることは、ある学生の勉強をする気がしない「私」の背後には、たとえば、将来が見えない「私」がいたり、そのくせ、将来を期待する私の「両親」がいたりするということである。

つまり、勉強をする気がしない原因は、決して勉強それ自体にはない場合が多く、多くは将来が見えないことで勉強する意味がわからなかったり、親からのプレッシャーを感じて鬱陶しく感じていたりすることに原因があるということである。ここで示す「私」や「両親」とのポジション結合全体は、学生の内面世界の否定的彩りの構造を示している（溝上編、二〇〇一も参照）。

筆者は、大学生論で表面上は学生たちの学びを問題にしているのだけれども、中心に見ているのは、学びの背後にある彼らの自己や生き方の問題である。具体的には、やりたことは見つかったのか、充実した大学生活を過ごしているのか、受験で頑張って乗り越えてきたのにまた勉強

やらされる、そういう意識をどうしているのか、などの問題である。彼らは、実際にはこうした問題を抱えながら勉強ができなかったり、学習意欲が低下していたりするのだと筆者は理解している。

学生たちと話をしている、学習内容や能力などが問題化している場合というのは、そんなに多くはない。表面上はそうであっても、その背後には、やらなければならないことはわかってはいるが、身体が動かないとかやる気がしないとか、つついゲームをやってしまうとか、そんなことで学びが問題になっていることが多い。つまり、学びそれ自体が問題というよりも、学びを通して見えてくる彼らの自己や生き方が問題だと筆者には思われるのである。

筆者がこの部分を大学教育の中で取り上げる理由は簡単である。つまり、大学受験は非常にわかりやすい人生の達成物語、グランド・ナラティブ（大きな物語）である。学生たちは訳がわからずとも、大学に入ったら将来が約束されている、とにかく大学に入ったらいいのだと自分の生き方問題を先送りにして、勉強にドライブをかけることができる。これは巧みな装置だと思う。しかし、実際大学に入ると、大学は改革が進んでいて、学生たちは大学に入った後も勉強しなければならぬということになっている。大

学生に勉強させるといふ現況の流れはもはや避けられないが、ただ私たち改革側というか、大学人としては、学生たちに訳わからず勉強してもらいたいとは考えないわけである。大学受験のように、問題を先送りして訳わからず勉強するような学生たちを、もう一度大学で作りたいとは考えたくないわけである。自分の人生や生き方にとつて大学での学びがどういう意味を持つのかをしつかり考えながら、大学で学んで欲しいと願っているわけである。だから、決して筆者は学生の学びを学びそれ自体だけで考えるのではなく、学びを取り巻く彼らの自己や生き方をも含めながら彼らの学びを考えているのである。

大学は、明確な学習目的をもつて動機づけられた大人が集まってくる場所とも言われる。そうなれば筆者も大変嬉しいし、筆者の仕事も楽になるだろうと思うが、少なくとも現況やこれからの十年くらいを見る限りでは、そんなことは現状から目を背けた夢物語のように見える。だから筆者は、大学での学びの意味を学生たちが自分の頭で考えることと並行しながら、大学教育の改革を進めていかなければならないと考える。少しでも良い大学に入って良い会社に入って、などという右肩上がりの出世物語を、今の学生たちは昔ほど理想とはしていない。良いキャリアを積ん

でいきたいとさえ思わない学生たちも多くいる。そんな学生たちを大学で勉強させるには、彼らの人生や生き方の問題をあわせて考えていく必要がある。そして、そういうことを考える場が大学の中に必要だと筆者は思うのである。

筆者は、二〇〇一年度から学び支援プロジェクトを京都大学で実施している。二バージョンあって、一つは「大学生活編」という授業、もう一つは「学び探求編」という授業である。

大学生生活編の授業では、学生たちに学業や学びの話は一切しない。「大学」「大学生」という共通テーマだけをたよりにして、そこで個人的にひっかかってくる問題を取り上げ考えていきましょうと言う。個人的な問題ではあるけれども、参加する学生全員で問題をシェアしながら議論し、検討していく。そして、この授業を通して何か一つでも答えが出るというんですね、という程度の授業者の期待だけ出しておく。

もちろん、筆者の中では、大学での学び問題を考えて欲しいという期待がある。しかし、それは出さないでカッコに入れる。そして、表面上は彼らの大学生活や人生ということが問題になるわけだが、それが検討される過程では、しっかりと学び問題も議論されるだろう、こういう読みを授

業のからくりとして込めている。筆者は、『大学生の自己と生き方』（溝上編、二〇〇一）で示した調査結果——大学生の自己評価の高低には学業の文脈がもつとも効いている——や他の調査結果を見ているから、学生たちの大学生活や人生の中で自発的に占める学びのウェイトは決して低くはないと考えていた。だから、「大学」「大学生」という大枠のキーワードで大学生活や人生に関することを議論させれば、自ずと学び問題は入ってくるだろうと考えていたわけである。

結果としては、六割から七割くらいの学生は、何らかの形で大学での学びを自分の問題とリンクさせて検討していた。他方、学びがまったく自分の問題意識に関わってこないという学生もいた。彼らにとつては、学びよりも、たとえばクラブの中でどうだとか人間関係を作っていくこととか、そちらの方が切実なテーマであった。もちろん、授業者としてはそれでもまったくかまわない。なぜなら、この授業では、自分の問題意識のみならず他の学生の問題意識にも付き合っ共同で検討することとしていたからである。どこかで学びの問題を取り上げている学生に出会えば、そこで「自分はこう考えている」などとコメントする形で、結果的には学びについて考える機会が得られることにな

る。詳しくは溝上編(二〇〇四)を参照して頂きたいが、いずれにしても、授業全体としては学生たちが、学びの問題をさまざまな形で議論する。もちろん、そうなるように授業をデザインし、かつ学生たちを暗に促してきたところもある。

さて、学び探求編の授業は去年実施したが、そこでは真正面から大学での学びを問題として取り上げた。また、そういうことに問題意識のある人集まりなさい、というように募集をかけた。すると、「授業が面白くない」「大学で何をしたらいいかわからないが授業だけは出ている」「勉強しなければとわかっているのだが、ついさぼってしまふ」などという学生が集まってきた。あとは大学生生活編の授業と同じである。ここでもやはり学生同士で議論をさせると、「君は授業が面白くないと不満を言っているだけで、何も自分ではしていないじゃないか」とか「少ないけれど、おもしろい授業だつてある。それを探す努力はしているのか」といった意見やコメントが出てくる。また、実際にいろいろ模索している学生がいたりして、それが他の学生の考え方や行動のモデルになる。モデルは理屈ではなくて、身近にあるものを探す。こうして、学生たちは「ああ、自分は面白くないと言って不満を言っているだけだった」

「もつと本を読もう」「先生と話をしに行こう」といったことになってくる。

興味深いのは、学び直球で授業をおこなっても、やはり議論には必ず学びの背後にある彼らの大学生活や人生、将来の展望が出てくるということである。大学生生活編であるうと学び探求編であろうと、学びを取り扱うウエイトや方略に違いがあらながらも、結局は同じことをやっている。

筆者としては、身体だけ教室に運んで訳わからず授業に出席するということはやめてほしい、自分たちで納得いくような学びを大学でして欲しい、自分たちのための大学であつて欲しい、そう願っているわけである。学び支援プロジェクトは、大学生活や人生に関わるレヴェルで学生たちの学び支援をおこなっているのである。

大学教育改革では、FD(ファカルティ・ディベロップメント)が叫ばれ、教員の授業改善が強力に進められている。それは大事なことだが、他方で筆者は学生たちに対して、「先生が良い授業をしてくれなかったら勉強しないのか」「おもしろかったら勉強するけど、おもしろくなかつたら去っていく。そんな受け身の姿勢でいいのか」と言わなければならないと思つている。学生たちも大学教育改革の主体である。そうでなければ、教員が表舞台に上がるだ

けでは、真に大学教育はよくならないと筆者は思う。

田 大学生に学びは必要か

冒頭で、「学生たちの学習意欲なんて低くても気にする必要はないよ」「そんなの最後には何とかなるものだ」というある識者のコメントを紹介した。筆者はこの類のコメントに常時さらされている。筆者は、大学人が学生たちに説得力をもつて、大学での学びが大事だと言えるかどうか、今後の鍵になると考えている。上記の識者は、この問題を投げ捨てている。

筆者の知る限り、これにある明快な答えを出しているのは、大久保幸夫編『新卒無業』である。彼は、職業能力として「知識・技術」「基礎的能力」「コンピテンシー」の三階層を挙げる。「知識・技術」や「基礎的能力」は職業を遂行する上で必要とされる基本的能力であるから、いわばコンピュータのハードのようなものである。「コンピテンシー」はコンピュータを使いこなす人間である。ここで、よい仕事をしたければ、古くさい処理の遅いコンピュータでは話にならないだろうから、やはりできるだけ最新の処理や技術の搭載されたコンピュータを必要とする。しかし、

コンピュータは立派だけれども、それをしっかりと使いこなす優秀な人材がいなければ、コンピュータは宝の持ち腐れとなる。

学生たちの大学での学びは、コンピュータで言えば、ハード作りであり、それを使いこなす人間作りの両面を含んでいる。大学は専門学校や職業学校ではないので、そこで教えられる学問や授業内容が社会で即効的に役立つとは基本的に考えられない。しかし、先が見えず、凄まじいはやさで変わりゆく現在の社会であるから、今役立つとわかっている知識や技術だけを学ぶのでは発展がない。筆者は、大学での学びの有用性は、この点において社会に開かれていないとは考えていない。学生たちには、即効的な有用論にとらわれず、広い気持ちで学習して欲しいと願う。これはコンピュータというハード作りの側面である。

他方、コンピュータを使いこなす人間作りの側面も、大学での学びとしては必要である。大久保氏は、「コンピテンシー」の獲得、とくに対人、対課題のスキルとして、「知識統合型のコミュニケーション能力」や「目標設定能力」「継続学習能力」の三つを挙げる。たとえば、違った意見を摺り合わせながら自分の考えをまとめたりプレゼンテーションをしたりすること、状況に応じて柔軟に目標を設定

・再設定すること、次々と新たに出てくる知識や技術を継続的に意欲的に学習していく力などのことである。これらは今の大学生を鳥瞰図的に見て、まったく欠けているところだと思ふ。そして、徐々に形をなしてきたとはいへ、今の大学教育ではまだまだ発展中の実践的課題である。しかしながら、こうしたコンピテンシーは社会、職場に出てすぐ身につくものではないから、教育機関在籍時から学問や知識の習得にあわせて身につけられるような大学側、学生側の改善努力が必要である。

以上のように、大学生の生きる世界のダイナミクスを明らかにしながら、それを大学教育の問題と摺り合わせて教育的課題を抽出していくのが筆者の大学生論の仕事である。まだ端緒を開いたばかりで十分ではないが、少しずつ地盤を固める努力をしていきたい。

参考・引用文献

- 小谷敏(編) 一九九三年、『若者論を読む』世界思想社。
溝上慎一(編) 二〇〇一年、『大学生の自己と生き方』大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学』ナカニシヤ出版。
溝上慎一 二〇〇三年、学生を能動的学習者へと導く講義型授業の開発―学生の内面世界のダイナミクスをふまえた教授

法的視点―。教育学研究、七〇(二)、一六五―一七五。

溝上慎一(編) 二〇〇四年、『学生の学びを支援する大学教育』東信堂。印刷中。

日本私立大学連盟 一九九二年、キャンパスライフこの二〇年―学生生活実態調査―。開成出版

日本私立大学連盟学生会 一九九七年、『学生生活白書―新しい大学のあり方を求めて―』開成出版。

日本私立大学連盟学生会 二〇〇〇年、学生生活白書『ユニバーサル化時代の私立大学―そのクライアントの期待と要望―』開成出版。

小此木啓吾 一九七八年、『モラトリアム人間の時代』中央公論社。

大久保幸夫(編著) 二〇〇二年、『新卒無業―なぜ、彼らは就職しないのか―』東洋経済新報社。

谷田薫 二〇〇一年、『カレッジコミュニケーション調査の二〇年』総研ジャーナル(関西学院大学総合教育研究室)、七九、一―一二。